

「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」開催

岡原 美知子

雨の中で集い始まる

紅葉が始まり秋の気配を感じさせる「安野中国人受難之碑」の周りは、朝からしとしとと小雨が降っていた。この夏の大雨で記念碑入り口の土砂が流され、土を平らにし修復した箇所が前日の強い雨で流されないかと心配しながら現地に到着した。被害もなく一安心して準備に取りかかることができた。

雨対策として記念碑前は透明のテント、参列者席は大きなテント2張りが張られ、準備万端だった。雨にもかかわらず、県内外から多くの人が集い、10月22日10時、安野記念碑前で「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」が開始された。今回、第3回訪日団として、中国から43人を迎える事ができた。しかし、その多くは被害者家族や遺族であり、生存者の参加は5月同様一人もいないのが66年という長い年月の流れを感じさせる。

安野に強制連行され、広島で犠牲になった29人とその後亡くなった方々への黙祷から集いは始まった。

「日中友好」を誓った集い

主催者「西松安野友好基金運営委員会」を代表して3人の方が挨拶を行った。

先ず、基金運営委員長内田雅敏さんの挨拶。

2009年10月23日の和解成立によって取り決められた和解条項の誠実な履行を行ってきたこと、追跡調査、認定作業、補償金支給、故地参観事業、昨年の除幕式以来3回の訪日団で100人を超える受難者と家族・遺族を迎える事ができたことを報告した。そして、この和解事業に参加した日中双方の人々がそれぞれの場で日中友好の着実な道筋を付けていくことを期待を込めて話された。最後に安芸太田町及び中国電力への謝辞を述べて挨拶を終えた。

次に、受難者・遺族を代表して曲啓傑さんが挨拶に立った。

曲さんは、記念碑前に来る度に気持ちが重く沈むと言いつつも、「歴史を鑑として未来に向かう」という精神で日中友好を祈念する。「安野中国人受難之碑」は「永久の碑」「友誼の碑」となり、歴史の悲劇を繰り返させないでしようと力強く宣言された。

最後に、西松建設株式会社を代表して代理人弁護士高野康彦さんが挨拶された。西松建設として受難者遺族に対して改めて、深甚なる謝罪の意を表明すると共に、3回の訪日団の招請と補償金の支給に日中の委員が尽力された事への感謝の意が述べられた。さらに、東日本大震災では、中国からの国際救援隊が派遣された事へのお礼も述べられ、互助互惠の実績によってさらなる日中友好協力関係の発展を祈念すると挨拶された。

続いて、多くの来賓を代表して、安芸太田町小坂眞治町長の代理、栗栖芳則副町長、中国駐大阪総領事館胡元元さん、善福寺藤井慧心住職、広島県議会東保幸議員の4人の方による挨拶が行われた。中国人劳工への哀悼の意を表明し、中国人強制連行・強制労働の歴史的悲劇を再び繰り返させないように、平和を祈念し、日中友好が更に発展し、アジアないし世界平和に貢献するよう心のこもった祝辞が述べられた。

その後、竹内ふみのさんによる二胡の演奏。演題は「小城故事」。亡くなった方々を哀しみ慈しむと同時に日中の人々の心を紡いでいく二胡の調べは、受難の碑や安野発電所水道管、山々へと深くしみいり荘厳な雰囲気醸し出した。二胡の演奏が続く中、参加者全員による献花を行い、集いは終わった。

土居で取り入れた川の水は、香草、津浪、坪野に至る8キロに及ぶ導水トンネルを通して発電され、安野発電所は今も電気を送り続けている。その事を広島の地に住む私たちは66年の長い年月を経ながらも歴史的恩恵を感じ、改めて負の歴史を和解の歴史、友好の歴史へとつないでいかなければと参加者がそれぞれ感

じる集いであったように思う。

その後、参加者は記念碑をゆっくりと見学し、中国人遺族・家族の方々は父・祖父の名前を探し指でなぞりながら安野の地で厳しい労働に従事させられた体験を追い求めている様子であった。記念写真撮影後、発電所上の貯水槽へ登り、当時の様子などを聞く事ができた。

忘れてはいけない歴史がある

午後は、つぼの地区交流センターで昼食を取り、当時を知る尾坂秋三さん（84歳）の証言を聞いた。尾坂さんは戦争中日本発送電で測量技師として働いており、測量事務所は工事現場に近かったので中国人の様子を知る人である。工事トンネルの中は水が出て、靴はぼろぼろで、冬でも裸足の人もいたと冬期の厳寒の中で厳しい労働をさせられていた中国人達の様子を語り、昔を知る人がいなくなったこと、語ってくれる人がいないことも嘆いていた。

しかし、忘れてはいけないと歴史の事実をしっかりと息子にも中国人の皆さんにも伝えていきたいと強い思いを語られた。



（上）証言する尾坂秋三さん

（下）つぼの地区交流センターで証言などを聞く参加者

谷キヨコさんが参加される予定であったが、前日入院されたとのことで、1999年に裁判所に出された陳述書が紹介された。

次に、裁判の口頭弁論の度に傍聴され、法廷の様子をスケッチされ続けてきた吉野誠さんが紹介された。

吉野さんは、原告団長であった呂学文さんが1997年に来日したとき、異境の地で当時夜空を見上げて望郷の念を謳った詩を、発電所の貯水槽の壁に書いたことを思い出し話された。そして、「月の光」をオカリナ演奏され、聞く者を強制労働の過去へと静かに誘い、当时に思いを馳せるひとときを作って頂いた。

訪日団を代表して、生存者邵義誠さんの代理で参加した張振倫さんがお礼を述べた。尾坂さんの証言でお父さんやおじいさんの現場での生活を想像することができたことを感謝し、これからの活動にも心を込めて参加していきたいと決意を述べた。

父・祖父の労働現場・収容所跡を訪ねて

その後、第三中隊の収容所があった津浪へ移動。昔は収容所があったが、今は稲が刈り取られた田んぼのほとりに立ち、尾坂さんから更に当時の様子を聞いた。

続いて第二中隊があった香草へ移動。ここでは、父が収容所の監視員であったため、自分も収容所に入入りにしていた栗栖薫さんが当時を生々しく語った。宿舍は狭く窓もない所で、昼夜二交代制であったため、50人ずつが交互に寝ていた。食事と言えばコーリヤンのマントウが朝昼晩とも1個。終戦前はドングリウの粉を混ぜた物で、とてもお粗末な物だったこと。トンネルの中と言え、常に水がザーッと流れ、足場もぬれ、服も体も濡れひどい状態であったこと。ダイナマイトで破壊した土砂を運ぶトロッコでの事故。そんな厳しい労働に耐えかねて逃亡した中国人には一層筆舌に耐え難い制裁が待っていたこと。

栗栖さんは時折言葉を詰まらせ、目を潤ませながら、誠に申し訳なく思っているとその胸の内を語った。じっと聞き入る中国人の家族・遺族の中にも顔をゆがめ涙ぐんでいる人が何人もいた。



参加者から、同じ労働に従事させられていた朝鮮人の様子や中国へ帰される時の状況について等、活発な質問が出された。

王相韓さんの孫の王亮さんは、「劉宝辰さんが探してくるまでおじいさんは何も話さなかった。それはあまりにも苦しかったので子どもたちに話したくなかったからだろう」と、栗栖さんの証言を聞いて、その労働の過酷さ故に家族に語らなかった祖父への思いを語った。

その後、土居取水口へ移動。邵義誠さんの証言を紹介。収容所の建物には窓もなく、自由に出入りできなかった。風呂はなく、川で体を洗った。朝6時から夕方6時まで働いた。川につかり一日中、川の石をトラックへ運んだ。足は腫れ上がり棒ようになった。おなかかすいてマントウを4人で盗んだ事があるが、ひどく殴られた。冬期でも冷たい川に入り、12時間も仕事を続けた当時の様子が伝わってきた。



土居の遺家族4人が尾坂さん、栗栖さんと記念撮影

陳立邦さんの証言も紹介された。陳さんは叔父と逃亡を計画し、17人が逃亡したが、全員捕まりひどい制裁を受け、それから監視が厳しくなったことを述べていた。

また、中国人が帰国時に善福寺前で写真を撮ったが、その写真や記念となる品物は文化大革命時に没収されたり自ら処分したことが明らかにされた。今も残るのは、日本発送電の測量技師が撮影した工事現場の写真しかなく、当時を知る中国人・日本人の証言を書き留め、伝えていくことの重要性を改めて感じた。

最後に、当日の各地点での受け入れを準備担当して

下さった中国電力の社員の方への感謝の言葉を主催者が述べた。さらに、最後までフィールドワークに参加された尾坂さんへもお礼が述べられた。

こうして長い安芸太田町での日程が終了したが、中国人遺族・家族の方にとっては、父や祖父の戦時中の足跡を追う旅として重要な一日であった。初めて知る異境の地、この地で戦時中に起こった歴史事実をどのように感じたであろうか。そして、初めて参加した日本側参加者、何度目かの人も何を感じ考える一日であっただろう。

加害の地から、和解の地へ、そして友好の地となることを、この日を共にした日中双方の参加者は深く心にとどめたと信じている。この日をスタートの日として、自らのこれからの責任として培っていききたいものだと強く感じた一日であった。

多くの地元の方々に感謝をこめて

この集いの日のために多くの方のご協力を頂いた。とりわけ、坪野の梶谷泰昭さんと吉村政則さんには記念碑周りの草刈り等から、当日のつぼの地区交流センターの準備と片付け等大変お世話になった。また、善福寺においては、集い前に本堂においてお線香を上げ亡くなった中国人への法要の機会を頂いた。尾坂さんと栗栖さんには当時の証言を聞かせて頂いた。そして、中国電力株式会社には当日のトイレ借用や、各施設の開放などお世話になった。ここに改めて多くの地元の方々に感謝申し上げます。こうしたご協力があったて集いが成功したことを心に刻みたい。



善福寺における法要の様子